

令和5年度 学校推薦型選抜 福祉情報学部 小論文
出題の意図と解答の傾向

第1問

【出題の意図】

「生まれてから死ぬまで、いつでも誰にでも必要な哲学」をテーマにしている梶谷真司氏の『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎新書、2018年）から、哲学対話の用途について述べられている部分を引用し、対話について出題をした。

コロナ禍で人との繋がりが希薄になったことや授業もオンラインで展開され、対話することから遠ざかっている受験生も少なくないと思われる。しかし、現行の学習指導要領では何を学ぶかより、どのように学ぶか、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」の教育実践が求められており、大学でも同様に、受け身の学びではそれらを得ることができないと考えられる。よって、本入試では学びを深めるために必要な「対話」について問う内容とした。

問1では、筆者が話し合いではなく対話を重視している点について、それぞれがもたらす結果を適切に理解し、簡潔に表現できる力が試される問題である。

問2では、「哲学対話」について自由に意見を述べることができる出題内容としたが、本学科では、「自ら考え行動する意志と共に、文化的・社会的基盤を異にする他者に対して関心を持ち、他者と協働して課題解決に取り組む姿勢をもっている。」ことをアドミッション・ポリシーの一つに掲げていることから、肯定的に捉える資質、かつ、自らの主張を織り交ぜて理論的に表現できる文章力があるかが問われる問題である。

【解答の傾向】

問1では、第一に「対話」と「話し合い」の違いについて述べられているかが重要である。この点に関しては、概ね良好であった。

第二に、「対話」をすることと「話し合い」をすることがもたらす結果について筆者の主張を簡潔にまとめることが必要である。対話では、「誰もが何らかの意味で自分事として受け止め、前向きに行動を共にすることができる」、話し合いでは、「何かを決めたとしても、軋轢や確執、なれあいが生じて結局うまくいかない」ことを述べて欲しかったが、対話では「近道」、話し合いでは「遠回り」になると記述した解答が目立った。なぜ対話が近道となり、話し合いが遠回りとなるのかを述べる必要がある。

問2では、「文中の具体例」を踏まえて記述する必要がある。この点に関して以下の様な解答の傾向が見られた。

- ・具体例の単語（いじめ、上下関係など）のみ引用しており、筆者の主張が引用できていない。
- ・具体例の引用ばかりで、それらを踏まえた自らの主張ができていない。

- ・具体例（文中での「学校」「会社」「地域コミュニティ」）ではなく、その他の文中の表現を引用している。
- ・具体例での筆者の主張と自らの考えが合致していない。

第2問

【出題の意図】

令和3年12月に開催された第16回健康日本21（第二次）推進専門委員会において厚生労働省から発表された、日本人の「平均寿命と健康寿命の推移」に関するグラフを資料として出典し、それぞれのグラフから正確かつ多面的に情報を読み取ること、また導き出された課題とその課題解決への道筋を検討できる力を有するかについて問う問題とした。

超高齢化社会の到来が目前まで迫り来る中で、疾病予防や健康増進、介護予防などを通して平均寿命と健康寿命の開きの縮小を目指していくことは、個人の生活の質の低下を防ぐとともに、社会保障負担の軽減にも繋がることが期待される点において喫緊の課題といえる。よって本入試では、平均寿命と健康寿命の年次推移における傾向を踏まえ、受験者自身が社会の担い手となった際の方策について、福祉情報学部での4年間の学びと関連づけて論じることを求めた。福祉情報学部では、「現代の福祉、健康、情報、心理に関する課題解決の道筋を深く考えることができ、自分の考えを他者に伝えることができる。」ことをアドミッション・ポリシーの一つに掲げていることから、本入試で取り扱う現代的課題に対するより良い解決策の道筋を、自身の学修も織り交ぜながら論理的に表現できているかが問われる問題である。

【解答の傾向】

男性・女性ともに平均寿命と健康寿命が平成13年当時と比較して延伸している点、ならびにそれぞれの年齢の平均値は、男性に比べて女性の方が高い傾向を示していることについては概ね読み取れていた。

平均寿命と健康寿命の開きが縮小傾向にあることについての記述があった解答は半分以下であり、さらにその状況に対する自身の考えや、より良い解決策に関する具体を示すことができている解答は少数であった。ここではこれらの現代的課題に対するより良い解決策とその道筋について、福祉情報学部での4年間の学びと関連を持たせて論じる必要があるが、その解答の多くは課題と学修の結びつきが見えづらい内容であった。